

## 【研究報告】

# 幼児のあそびや生活に果たす絵本の役割について — 実践事例における絵本の位置づけを手がかりにして —

大元 千種

## 1 研究の目的

絵本の読み聞かせは、幼稚園や保育所、認定こども園など幼児教育・保育の場において、日常的に取り入れられている。乳幼児期に絵本や物語にふれることによる教育効果は認められており、積極的に行われている。たとえば、絵本の読み聞かせの意義について、青戸・田邊・原田（2018）によれば、「想像力」、「感情の共有」、「教養」、「文字への興味」、「ふれあい」の5因子が抽出されている。幼稚園教育要領においても次のように絵本に教育的効果が期待されている。すなわち、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の、「(9) 言葉による伝え合い」に、「先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる」と記載されている。「ねらい及び内容」の「ねらい」には、「(3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる」、「内容」には「(9) 絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう」と記載されている。さらに、「内容の取扱い」において、「(3) 絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること」、「(4) 幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること」と、記載されている。保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領においても同様である。

このような絵本の効果は、乳幼児がおとなから絵本を読んでもらって絵本に親しんでいるからである。いわゆる絵本の「読み聞かせ」による効果が大きいのである。特に集団保育の場では、子ども集団への読み聞かせになる。田代（2001）によれば、そのことがひとり読みやおとなの絵本の読み方との違いになる。絵本の「読み聞かせ」には「絵」と「文」、「ページをめくる」の三つの要素が統一した形態である。「読み聞かせ」では、子どもたちは「絵」を見ながら「文」をおとなの声で聴きとる。おとながページをめくるので、子どもたちは期待をこめて次のページがめくられるのを待つことになる。ページがめくられると自分の思い描いていた画面や、そうではなく思いもしなかった画面があらわれる。そのページをめくる間も子どもたちにとってはハラハラドキドキする時間なのである。田村は、ページをめくったときの子どもたちの表情やため息などから子どものこころの動きが感じ取られると述べている。ページをめくることについては、奥山・香曾我部（2008）も、保育者が「視線」と、イメージの共有化を援助していると指摘している。「ページをめくる」という身体表現が幼児の発話や興味、関心、聞く姿勢等をコントロールし、しかも集団読み聞かせであれば、友達と共感、共有する体験ができるのである。これは、ひとり読みではできない集団での読み聞かせならではの体験である。また、読み聞かせてもらうと、文字よりも「絵」をじっくり見ることになるので、物語と直接かわらないサイドストーリーにも気づくことができる。それが絵本のさらなるおもしろさとなる。しかし、文字が読めるおとなは、絵本の「文」をまず読み、「絵」は挿絵的に見るが多くなり、サイドストーリーよりも物語のストーリーを追って理解することが中心になる。おとなの絵本の読み方

は、子どものような「読んでもらう」絵本の楽しみ方や体験とは異なるのである。

ところで、日常的に絵本が幼児教育・保育に取り入れられているといっても、その取り入れ方はさまざまである。子どもたちが自由に絵本を取り出すことができるところや、保育者が絵本を管理して、時間を決めて読み聞かせするところもある。また、絵本の読み聞かせも、絵本の時間を特別に設けているところもあるが、朝の集まりの時や活動の前の導入、午睡前やおやつの前、降園の前などのちょっとした時間を使って絵本の読み聞かせを行うなど、保育のなかでは様々な時間で読み聞かせがされている。特に、降園前や昼食前などの活動の合間を使って多く行われている(横山・水野, 2008)。さらに、何人の子どもたちを対象にして読み聞かせをするのかということでも、子どもによる絵本の理解力や体験は異なってくる(中澤・杉本・衣笠子・入江, 2005 / 大元・青柳, 2012)。子どもの日常生活のなかに絵本が様々な位置づいているのであれば、その絵本が子どもたちのあそびや生活に及ぼす影響も多様である。子どもの年齢や興味・関心、絵本の種類によっても異なる影響をもたらすと考えられる。

そこで、本稿では、保育の現場で絵本がどのように位置づけられ、子どものあそびや生活にどのように影響をもっているのかについて、実践記録を分析することによって明らかにする。

## 2 研究の方法

2019年9月に開催された保育の研究会において提案された実践レポート<sup>1)</sup> 49本のうち、絵本について何らかの記述がある13本のレポートを分析する。その研究会の21の分科会(交流会含む)では、実践レポート(提案)をもとに参加者とともに検討が行われ、実践が深められている。絵本や劇あそびの分科会もあるが、本稿で取り上げる実践レポートは、その分科会に関係なく、すべての分科会で提案された実践レポートを対象にして、「絵本」という表記があるものを抽出した。

抽出した実践レポートを、取り入れた絵本<sup>2)</sup>、対象の子どもたちの年齢、実践レポートの概要、実践者の気づきにまとめ、分析をおこなった。提案された分科会の主旨に応じた実践レポートの内容であるため、必ずしも絵本がメインになっているわけではない。それゆえに、子どもたちの日常に織り込まれている絵本に関わる活動や友達関係、保育者の意図などを読み取ることができると考えられる。

## 3 研究の結果

### (1) 絵本についての記述のある実践レポートの分類

実際の保育には、もっと多くの絵本や図鑑が取り入れられているであろうが、ここでは実践レポートに示されたもののみを取り上げることとする。抽出した実践レポートは、表1に示すように、「生活発表会などの劇あそび(劇ごっこ)」、「興味やあそびから発展した活動」、「ごっこあそびへの発展」、「保育者による仕掛けあそび」、「自己表現に関わる活動」「保育環境」の6分類することができた。

表1 絵本について記述のある実践レポート(13本)

分類	本数	対象年齢と実践レポート見出し
生活発表会などの劇あそび(劇ごっこ)	4	2歳(A、B)、3～5歳(C)、5歳(D)
子どもの興味やあそびから発展した活動	3	2歳(E、F)、4・5歳(G)
保育者による仕掛けあそび	2	3歳(H)、4歳(I)
自己表現に関わる活動	2	3歳(J)、4・5歳(K)
ごっこあそびへの発展	1	2歳(L)
保育環境	1	0～2歳(M)

実践レポートの中に異年齢児との関りがあるものや同じクラスの子どもたちの3、4、5歳各クラスでの活動を取り上げたものがあったため、対象年齢は、0～2歳児が1本、2歳児が5本、3歳児が3本、4歳児が4本、5歳児が4本であったが、実践レポートそのものは13本である。

それぞれの実践レポートについて、以下の分類ごとに（２）～（７）で検討をする。表１の年齢の後の（Ａ）～（Ｍ）が実践レポートの見出しと対応している。なお、実践レポートについては、レポートのタイトルを「 」で、実践者名を（ ）内に示す。本研究での実践レポートの使用およびタイトルと実践者名の表記については、すべて園長と本人の承諾を得ているが、所属については、一部の園からの要望により、すべてアルファベット頭文字記名とする。

## （２）生活発表会などの劇あそび（劇ごっこ）

### A 「絵本を通してのつながり～友達っていいな～」（福岡県 S 保育園 立石絵里子）

対象児の年齢：２歳

取り入れた絵本：図鑑、『カブトムシのぶんちゃん』シリーズ、『いもむし列車』

実践レポートの概要：保育者が一人の子どもに絵本を読んでいると、「これもよんで」と他の子どもたちも集まってくる。子どもたちは絵本が好きだということを実感し、絵本をきっかけに少しでも子どもたちとの距離を縮めていきたいと思う。10月の子どもたちは、虫探しを楽しみ、バケツにダンゴムシやミミズをたくさん捕まえて大事に観察している。図鑑を広げて様々な虫を調べたり、友達と見せ合いを楽しんだりしているが、夏からカブトムシの飼育が日課となっていることから、特にカブトムシのページは大興奮で見入る子どもたちの姿がある。絵本も、『カブトムシのぶんちゃん』など虫が登場するものを好んで見ている。発表会に向けて、子どもたちが大好きな「いもむしれっしゃ」を保育者が提案すると、「したーい！」という子どもたちの声で決まる。発表会後も日常のあそびの中で、いもむしれっしゃごっこを楽しんだり、バッタやトンボになりきって、クモと綱引きしたり、カブトムシと相撲対決をしたりと力比べをする。自分一人の力ではかなわなかったこともみんなで力を合わせるともっと力が大きくなることに気づき、次第にみんなで力を合わせるようになる。恥ずかしくてなかなか前に出てこれなかった子どもも勝負に加わるようになり、綱引きや相撲大会でも勝つことができた。

実践者の気づき：絵本を通して友達とのつながりが非常に感じられた半年間である。絵本をとおして、様々なことを経験し、友達を意識するようになった。泣いている子がいると「どうしたの」と声をかけ、泣いている子もすぐに保育者を求めず、友達に話を聞いてもらったことで落ち着き大きなトラブルに発展することも少なくなった。

分析：２歳児であるため、発表会に何をするかは、保育者が決めることになるが、その際に次のような配慮が求められる。一方的な決め方ではなく、子どもの関心やあそびにあった絵本を子どもたちと対話しながら決めていく必要がある。子どもの声や姿を受けとめる保育者の姿勢や、子どもに読んだり子どもが自由に手に取ったりすることができる絵本を日常的に準備しておくことなどが問われる。この実践では、絵本だけでなく図鑑が大きな役割を果たしていることに気づかされる。生き物への子どもたちの興味・関心を広げ、理解を深めていくとともに友達とのつながりをつくっていくなど、２歳児にとっての図鑑の持つ力を確認できる実践である。

また、保育者が発表会に向けての練習や台詞や振り付けなどの指導で熱が入り込みすぎ、子どもの思いとずれてしまうこともある。この実践では、２歳児たちの言葉や行動がよくとらえられた活動展開になっている。発表会も日常の活動やあそびの流れで取り組むことができおり、しかも子どもたちに必ず提案したり相談したりと、子どもの声と関心をよく汲みとっているため、無理のない活動の展開となっている。さらに発表会で終わりではなく、その後もいもむしれっしゃのあそびを楽しむ姿や友達と力を合わせる姿など、絵本から発展した子どもたちの豊かなあそびの広がりを見ることができる。

## B「お散歩で育つ心と身体」(熊本県 O保育園 村上海菜子)

対象児の年齢：2歳

取り入れた絵本：『ぐりとぐら』

実践レポートの概要：A君は、自信がなく大人の指示がないと動けない様子だった。毎日の散歩でも顔色もさえず、「きつい」「いかない」と消極的である。保育者とのんびり話しながら虫や草を見つけることで、散歩を楽しいものにしていく。階段の頂上から「おーい」を呼びかけたり、通る車を「あれは？」と保育者に問いかけたりするようになり、次第に1km、2kmと散歩の距離も伸び、「〇〇に行きたい」と要求も出せるようになっていった。普段の生活も生き生きと明るく生活できるようになる。後を追うなど少しずつ友達に関心をもつようになり、保育者をままごとに誘ったり、集団あそびを取り入れたりと、10月ころからは友達をあそびに誘う姿もみられる。12月の発表会の劇あそびではぐりとぐらになりきり、大きな声を歌を歌い、保護者も保育者も感動した。

実践者の気づき：変わっていくA君の姿に保護者も保育者も驚かされた。散歩活動で得た達成感の積み重ねで自己肯定感を高め、日常生活でも自信を持ち意欲的に関わったのではない。保育園が見晴らしの良い高台にあり、急坂、広い畑、町民グラウンド、図書館、交通の利便性と環境に恵まれていたことも大きな要因である。

分析：発表会のぐりとぐらの取り組みについてはあまり触れられていないが、自信がなく消極的なA君が、毎日無理のない散歩を続けることで体力もつき、いろいろなモノに触れ、保育者や子どもたちとの関りのなかで自信と意欲が培われたのであろう。また、保育者がA君の姿を見ながら、ままごとや集団あそびを取り入れたこともA君が自らを変える力となり、友達とイメージを共有することができるようになったと考えられる。その土台があって、ぐりとぐらになりきって劇あそびをし、大きな声で歌をうたうことができたと考えられる。もちろん、子どもの大好きなぐりとぐらではあるが、ただのまねではなく劇あそびでなりきるためには、子どもたちのイメージの共有と意欲がないところではできない。その点を保育者がきちんと理解し、無理なくいてねいにAくんに関わっていき、Aくんの変化を見守り支えている様子が見られる。

## C「仲間とうたが勇気をくれるとき」(福岡県 S保育園 古野沙也佳)

対象児の年齢：同じクラスの子どもたちの3歳から5歳ころまで

取り入れた絵本：3歳『小さいお城』、4歳『西遊記』、5歳『ロボットカミイ』

実践レポートの概要：3歳のころの子どもたちは、集団あそびやごっこあそびが好きで、たくさんの想像の世界が広がる物語の絵本にもふれた。特に『小さいお城』が好きで、「だれかいますか？」と繰り返しの問いかけや、保育者がクマになって子どもたちが逃げる遊びを楽しむ。絵本の「みんなでおどろう」の歌も好きなので、劇あそびにつなげる。劇あそびに入る前に再度絵本を読んでから取り組みを始め、絵本にあわせて「どうぞ」と言ったり、クマたちとたたかう場面では「がんばれー」と共感したり、歌も心を一つにして楽しく歌うことができた。

4歳のころには、自信がない子どもたちが多くことから、一人ひとりが主役という自分を認める気持ちや自信につなげてもらいたいと、一年間のテーマを「孫悟空」になりきることに決める。『西遊記』の話を何度も読んで孫悟空の心の強さを伝え、運動会や劇あそびにつないでいく。

4歳から5歳になるころには、子どもたちの心のよりどころを創りたいと保育者が「ロボットカミイ」を作る。子どもたちが登園する前にカミイを部屋に座らせ準備をしていると子どもたちが「カミイがいる」と集まってき、子どもたちの生活に溶け込んでいった。

5歳では、カミイに出てくるお店やさんごっこに取り組む。

実践者の気づき：子どもにとって歌は気持ちを表現し、勇気をくれるたいせつなものであることにあらためて気づけた。子どもたちの力を信じて、仲間とのふれあいの中でのびのびと自己表現をし、心を育てる保育をしていきたい。

分析：3歳から5歳までの取り組みが概観されており、たくさんの絵本や物語、歌とともに過ごしている子どもたちの様子がわかる。3歳のころは、保育者も子どもたちが絵本の世界と日常の世界とを行き来しながら遊ぶ子どもたちの様子をみながら、一緒にあそびをつくっていった。ところが、4歳、5歳になるにしたがって、子どもの今の姿から「こうあってほしいと」というねらいをもって、保育者が物語を設定したり、カミイを作って保育室に準備をするなど、保育者主導の傾向がみられる。ただし、保育者主導であっても、日常的にたくさんの絵本や物語に子どもたちは触れており、子どもたちに物語が入っているため、その物語の内容やテーマをイメージしやすく、保育者の意図にあった展開が期待できたことが読み取られる。子どもたちと相談して決め、取り組みも子どもたちと一緒にできたら、さらに子どもたちが集団としての達成感を味わえ、自信につながっていったと考えられる。

**D 「泣いて、笑って、ケンカして～16人の仲間と育つりおなちゃん～」(熊本県 K保育園 大森美恵・森山千恵)**

対象児の年齢：5歳（4歳から）

取り入れた絵本：『クムガンサンのトラ』

実践レポートの概要：りおなちゃん（体幹機能障害）は4歳で入園し、当時は体がうまく使えず、ハイハイで移動し、言葉の理解力も難しく、発達年齢は1歳から1歳半程度であった。ピアノを担当が弾くときに必ずピアノにつかまり立ちをしていたが、次第にピアノの音にあわせて体を動かすようになり、担任と目が合うと笑うようになっていく。

5歳になり、りおなちゃんのお手伝いをする応援隊ができたが、次第に応援隊をあごで使うようになったり、一緒にしようと誘う応援隊に激しく怒ったりするようになり、応援隊を終了する。しかし、「応援隊」がいたことで、りおなちゃんは自分から友達に関わるようになり言葉の数も増え会話も上達してきた。りおなちゃんも子どもたちも思いを伝えることができるようになり互いに育ちあっていった。イヤイヤ期では好き放題、言いたい放題をやらせたところ、次第にイヤイヤがへり、何事もすんなり受け入れるようになる。運動会では5mの距離を歩行器で走りりおなちゃんに声援があり、その反対に他の子の跳び箱とびでは、りおなちゃんの応援があり跳び越えることができた子どももおり、ハイタッチで喜び合う。2月の発表会の「クムガンサンのトラ」の劇では、1月の練習中からトラが怖いと何度も泣くが逃げ出そうとせず、本番でも自分の出番で自分から出ていき演じることができ、歌も歌っている姿に心を一つにできたことと保育者は実感する。りおなちゃんは、エンディングのあと「がんばったー」と保育者に抱きついて号泣する。

実践者の気づき：保育者はりおなちゃんにどんな保育をしたらよいか不安があった。「こっちをむいて」と思えば思うほどりおなちゃんは保育者たちを悩ませたが、「好きにしたらいい」と力を抜いた瞬間、こちらをむいてくれた。りおなちゃんが、保育者に力を抜くことの大事さを教えてくれた。自分の保育を信じ、りおなちゃんと本気で向きあい、りおなちゃんの一步一步の成長を応援し支えてくれた友達の存在で、大きな成長を見せてくれた。卒園間近には発達年齢が2歳半から3歳に育っていた。

分析：『クムガンサンのトラ』の絵本をもとにした劇づくりがどのように行われたかは記述されていないが、りおなちゃんが泣くほど恐がるトラが出てくる絵本であるので、通常であ

れば、りおなちゃんが好きな別の劇に変更しそうである。しかし、ここでは保育者はこの劇を発表会でやることにする。子どもたちとどのような話し合いがあったかわからないが、りおなちゃんは逃げ出そうとせず、自分の役割を果たすことができる。絵本のメッセージ性がりおなちゃんに伝わったのもあろうが、それまでに積み上げてきた保育者やクラスの友達との関係が大きく作用したことが感じ取られる。自分を受け入れ、認め、支えてくれるだけでなく、互いに励まし合える仲間の存在は大きい。障がいをもっているりおなちゃんに対する、保育者の度量の広さと深さを感じられるが、保育者がりおなちゃんとクラスの子どもたちを信頼していることも伝わってくる。この絵本での劇は、年長だからということではなく、りおなちゃんがいるこのクラスだから行えることができたといえる。クラスの子どもたちとの取り組みの集大成としての絵本をもとにした劇である。

### (3) 子どもの興味やあそびから発展した活動

#### E「虫愛でる2歳児となかまたち」(熊本県 Y保育園 米村友紀)

対象児の年齢：2歳

取り入れた絵本：『カブトくん』、ダンゴムシの絵本、『おいしいおとなあに?』、『じめんのしたの小さなむし』

実践レポートの概要:虫好きのあっくんとひーくんは朝のお集まりの歌や絵本に見向きもせず、園庭で虫探しをしている。「このままでいいのかな」と保育者には迷いもあったが、生き物への興味・関心をたいせつにしたいと、絵本や歌に二人の大好きな虫のものを多く取り入れる。それでも参加しないこともあったが、二人の思いをいったん認める。二人が見つけたものはみんなに紹介して、クラスに位置づけていく。8月にカブトムシをつかまえて、お世話(餌やり)をし、餌を食べる様子を見る。『カブトくん』の絵本をよく読み、幼虫から成長してカブトムシになることを知り、あっくんが何かの幼虫をカブトムシの幼虫と言って同じケースで飼う。1月、ダンゴムシのおうちづくりから、ダンゴムシをみんなで飼うことになる。保育者が絵本を読み、石や葉などを食べるのがわかる。給食でも「ダンゴムシは石と葉っぱのご飯です。みんなのは？」とメニュー紹介を楽しむ。なっちゃんは『おいしいおとなあに?』のワニがせんべいを食べてるのを不思議がるなどそれぞれの生き物で食べるものが違うことが子どもたちにこれまでの経験でわかってきている。1月、『じめんのしたの小さなむし』の絵本を読むと、何の虫かわからない”ぼく”がシロテンハナムグリになる。あっくんのカブトムシとそっくりだけれど、2歳児は幼虫からシロテンハナムグリになったときにわかるだろうと、保育者はそのままにしておく。

実践者の気づき:子どもたちにとって生き物は、動くおもちゃであり、親しい遊び友達である。愛着をもったり物として扱ったり、どちらも2歳児の姿である。おとなとして伝えるべきことは何かを考えていきたい。子どもの興味は、まず動くことのおもしろさで、次に何を食べるのか、どんなうんこをするのかを生き物と生活をともにする中で見つめてきた。保育者も子どもたちと同じ目線になってともに発見し伝え合う中で気づきがあった。発見の一つひとつを大切にすることで、子ども一人ひとりに「あなたは大切な存在だよ」というメッセージを手渡せるように思う。

分析:虫好きの二人の子どもの大好きな虫の絵本から子どもの関心をひきつけようとするが、必ずしもうまくいかない。二人が発見したものを一つ残らずたいせつにクラスのみんなに紹介していくことで、二人をクラスに位置づけ、他の子どもにも虫の魅力を伝えていくことになる。カブトムシとクワガタムシを捕まえて飼育する過程で、絵本をとおして食べるものや幼虫から成虫に変化することなどを、子どもたちが学び取っていく。絵本が子ども

の不思議や疑問に答え、次の活動を支えている。

F「平成30年度 平和教育への取り組み」(長崎県 Sこども園 鷹見沙也香・立木純子)

対象児の年齢：2歳

取り入れた絵本：『ゆっくとすっくきょうからおともだち』、『ともだちがいっぱい』、『ピカドン』  
『からだのなかでドゥンドゥン』、カニが出てくる絵本

実践レポートの概要：生き物が好きな子どもたちであるが、ダンゴムシをたくさん集めてもつぶしてしまうなど触れ合い方がわからない。5月、保育者が小さなカニを見つけ、子どもたちの「いっしょにいる」という声でみんなで飼うことに決まる。名前は、Kちゃんの「ハッチは？」の提案で決まる。毎日、餌やりをし観察するが、子ども同士で押し合いやケースの取り合いになることもある。そうするとカニが動かなくなることに気づいたNちゃんが、「びっくりして動かなくなるから、静かにして」とハッチの気持ちを代弁することで、譲り合う姿がみられるようになる。誕生会のその年のテーマは「友達」で、6月は保育者が『ゆっくとすっくきょうからおともだち』をペープサートにして友達といることの楽しさや嬉しさを伝える。7月の誕生会には『ともだちいっぱい』をパネルシアターにして友達みんながつながっていることを伝える。子どもたちが命の大切さに気づいてきており、柿の木が焼けこげながら復活し今では実もつけていることから、「平和の木」を創ることにする。「青い空は」や「いまこのときに」の歌や『ピカドン』の読み聞かせ、柿の木の話などをして、みんなで「命の実」をつくらうと呼びかける。2歳児の理解度は様々で、自分なりに理解して作ろうとする子どもや純粹に制作を楽しむ子と様々であるが、8月の平和の集いで「平和の木」に点灯をする。9月、10月にはカニの出る絵本に「ハッチだ」と言う姿もある。命の音を知ってほしいと『からだのなかでドゥンドゥン』の絵本をペープサートで行い、友達の胸に耳を当て命の音を聞く。11月、ハッチが死ぬ。「ハッチ動かないの?」、「なんでしんだの?」と不思議がる子や「悲しいね」、「死んだらいやだ」と死を理解している子など反応は様々である。「お空に行ったの?」と言う子もおり、それからも絵本にカニが出てくると「みんなのことお空からみているよね」と、子どもたちの心の中に仲間としてしていることが感じられた。

実践者の気づき：ハッチとの出会いを通して子どもたちにハッチは大切な仲間となり、死を通して、命の大切さを身をもって教えてくれた。保育者が思っていた以上に子どもたちとハッチとの絆ができており、ハッチの死後もハッチを思う。ハッチが死んだとき「お空の上に行ったんだよね」と言った子どもの姿に、長崎の原爆や命について伝えてきたことが経験となって思いをはせることができたと感じる。子どもの言葉は日頃の保育者や身近な大人が子どもたちに語り掛けている言葉だということも感じた。

分析：友達、平和、命という抽象的なテーマについて、小さなカニのハッチとともに過ごすなかで、具体的に子どもたちが感じ取っていている。具体的に記載されていないが、カニの出る絵本でハッチをより身近に感じ、餌やりや散歩などよくハッチを観察することも2歳児がカニを理解することにつながっている。程度の差こそはあれ、思いをこめて世話をした友達であったからこそ、死や命について理解できたのではないか。また、保育者たちがカニにこだわらず、友達をテーマにした絵本を読み聞かせではなくペープサートやパネルシアターにして子どもたちに見せていることも、2歳児が絵本の内容を理解するこ上によりわかりやすくしているのではないかと考えられる。保育者の教材分析と準備が感じ取られる。

G「子どもが選んだ好きなあそびを保障することで」(鹿児島県 K保育園 川越梨奈)

対象児の年齢：4・5歳(異年齢)

取り入れた絵本：『カッパおやじ』、図鑑

実践レポートの概要：この園では、例年7月のお泊り保育にむけてファンタジーで遊ぶ活動の計画をやめ、5月末の子どもの姿から立案することになっている。5月ころの子どもたちは園舎の周りでザリガニ、カエル、虫などたくさん捕まえられることがうれしくて、羽や足をひっぱって死なせてしまう。命のたいせつさを伝えたいと、カッパおやじを登場させて仕掛けてみたが、保育者主導のファンタジーになっていたのではと感じる。保育者は子どもに命のあるものへの関わり方をどう伝えるか悩む。しかし生き物に対する一見残酷に見える姿から、死も一つの学びではないかと考えるようになり、ファンタジーあそびを休み、食の活動や生き物とかかわるあそびを中心に取り組む。子どもたちは虫取りあそびを重ねることで、図鑑を手に取り、餌や飼育の仕方を考えるようになる。図鑑と照し合わせる姿もあり、虫を捕まえるだけの目的から、虫の世界を知ろうとする姿に変わる。運動会の入門場門作りの話しあいでは、「虫をつくりたい」と捕まえた虫を観察しながら丁寧に色塗りする。遊んでいく中で観察し、学んでいた子どもたちの育ちの姿に保育者は気づくことができた。

実践者の気づき：食も生き物と遊ぶ活動も実体験を伴うあそびで、事実と照らし合わせながら考える力が育っていくことを感じた。自分で選んだ好きなあそびが保障されることで、仲間とともに楽しいあそびを積み上げ探求心を深め、自分たちのあそびをより豊かに工夫していく育ちにつながると感じる。ファンタジーのあそびをいったん立ち止まって考えた時に、こうした育ちの力が土台にあることで、子どもたちは豊かなイメージを持って遊んでいくことができるのではないか。

分析：保育者が、ファンタジーあそびが保育者主導の一方的な保育であることに気づき、子どもの興味やあそびに保育の出発点を仕切り直しているところは、この保育の重要な切り換え点となっている。子どもたちが好きなものや興味のあるものであれば、真剣に取り組んでいくことにも保育者は気づき、興味や探究心をたいせつにし、子どもの要求を入場門作りにつなげるなど、子どもとともに創る保育になっている。その一連の活動の中で子どもの観察力や実践力を図鑑が育てているといえる。

#### (4) 保育者による仕掛けあそび

H「オオカミと24ひきの子ヤギ」（長崎県 T保育園 米倉純子）

対象児の年齢：3歳

取り入れられた絵本タイトル：『オオカミと7匹の子ヤギ』

実践レポートの概要：この園では、例年3歳児は発表会で劇ごっこを行っている。5月連休明け、今年の題材を何にするかを担任間で話して、「オオカミと7匹のこやぎ」が候補になる。オオカミとの繰り返しの掛け合いが楽しく、子どもたちにとってわかりやすい話であり、園にはなんとといっても触れ合って遊ぶことができる3匹のヤギがいる。8月に絵本の読み聞かせを開始すると、Eくん「オオカミ怖い」、Sくん「怖いからいや」の反応がある。担任は怖がりな子どもたちが、オオカミに立ち向かえた達成感を遊びの中で味わうことができるよという思いがあり、繰り返し読み続ける。そのうち子どもたちは物語を覚え、Kくんが「読んで」とリクエストするようになる。怖がっていた絵本も読み続けることで大好きな絵本に変わった瞬間のように感じられる。それからは午睡前に読む絵本の定番になる。1月の行事の「夜の保育園で遊ぼう」では、クラスみんなで力を合わせてオオカミに立ち向かおうということに決め、悪いオオカミから3匹のやぎをみんなで守ろうという流れで仕掛け遊びをする。オオカミが閉じ込めたヤギを助け、夜は奪われたお守りと園長

を探し出す。オオカミは怖い存在だけれどみんなで協力すれば乗り越えられる経験をする。その後、劇ごっこへスタートしたが、夜の保育園の経験があるため、クラス全体がやる気で満ちていた。台本作りでは最後の結末に悩み、オオカミのお腹に石を詰めたところで終わるようにした。台詞は、保育者が子どもたちに合わせて選んで決め、11月17日、園庭で遊んでいる時に、一人ずつに劇の台詞を渡していく。午睡前の絵本の読み聞かせのとき、台本を読んでみると、Mちゃんが「私の台詞だ」と気づき、Kくんも「さっき園庭で言ったよね」と、1回だけ教えた言葉が子どもたちに残っていた。あらためて子どもたちに劇ごっこをする話をする。子どもたちは物語をしっかりと覚えており、担任が軽く促すだけですぐに台詞が出てくる。練習を重ねていくうちに担任に欲が出てきて、「もう少し!」と指導に熱が入り、反省の毎日となる。子どもたちは初めての劇ごっこが楽しいようで、外に出ると「オオカミごっこしよう」と自由に世界観が広がり、当日も子どもたちが楽しんでいる様子だった。

実践者の気づき：仕掛けあそびを楽しみ、みんなで協力する気持ちが高まった。取り組んだ劇ごっこで物語の世界観の広がりを感じている。クラスで団結して一つのことに取り組む楽しさを、この劇ごっこを創り上げる過程の中で強く感じた。

分析：低年齢児のあそびの場合、保育者が仕掛けてあそびを創っていくことが必要な場合が多い。特に、発表会などで劇ごっこをする場合は計画的に取り組んでいくことになるが、子どもの姿や、子どもの思いとずれていないか、保育者の思い込みだけで行っていないかという問い直しが必要である。この実践の場合、保育者が題材を選び、子どもが恐がっても何度も読み込んでいくうちに子どもにとって好きな絵本になり、午睡前の定番の絵本になっていく。物語もよく子どもたちがわかっているからこそ、8月の仕掛けあそびでは、オオカミから3匹のヤギや宝物を守るという共通のねらいをもち、あそびをイメージして行えたのではないかと考えられる。また、劇ごっこも1回伝えた台詞が子どもにすんなりと入るというのも、それまで絵本の読み聞かせで物語がしっかり入っていたからであろう。「3歳児＝劇ごっこ」のイメージが多いが、集団でイメージを共有し劇ごっこに創り上げるには丁寧な取り組みが必要であることがわかる。

#### I「子どもの声から始まる遊び～『カエルの豆太』の出会いから仲間づくりへ～」（長崎県 T 保育園 峰拓海）

対象児の年齢：4歳

取り入れた絵本：『カエルの豆太』

実践レポートの概要：この園では、5月と11月にお泊り保育があり、毎年11月は前後に仕掛けあそびをして、発表会にする劇の題材に子どもたちが入り込めるようにする。その年は子どもたちに仲間のたいせつさを伝えたいと思い『カエルの豆太』にする。10月、里山に遊びに行った帰り、子どもが「これ豆太のかさじゃない？」と言うツワの葉を園に持ち帰って子どもたちに見せると「豆太のだよ」と口々に言うなど、豆太への期待感が子どもたちに生まれる。ツワの葉を里山に返すと、二匹の茶色のカエルが玄関におり、子どもたちは「豆太じゃないよ、ホーおばさんだよ」「お礼に来たんじゃない」と言いあう。この姿から保育者は「誰かのために頑張ることは気持ちがいい」ということも感じさせられるのではないかと、仕掛けあそびに入る。子どもたちと相談して手紙を書いて里山にカエルを返す。「カエルたち何をしたら楽しく遊べるかな」という保育者の問いに「沼があればいい」という声があり、沼づくりに取り組む。「豆太が里山で楽しく遊んでくれるように」という想いを込めて作り、できたら「豆太きてね」と呼んだり歌をうたったりする。お泊り保育が近づいてきたころ、お泊り保育の日に里山に行きたいけれど道がわからないという豆太から

の手紙に、子どもたちと相談して、地図を作って畑にもっていく。お泊り保育の日、豆太の巻物シアターを読んでいると「カエルの影が見えた」という職員の叫びに、みんなで里山に豆太に会いにでかけるとカエル（職員）たちの歌声が聞こえ、沼の周りのカエル（職員）たちが「発表会で僕たちの劇をするんだってね、頑張ってる」と呼びかけ、一緒に歌を歌うという流れであった。やっとカエルたちと友達になれて嬉しいと泣く子もいる。子どもたちはその後さらに物語を理解しようとしたり、登場人物の感情を考えるようになった。実践者の気づき：豆太に「発表会頑張ってる」と言ってもらうことで、子どもたちは物語をさらに理解しようとし、登場人物の感情を考えるようになるなど、意欲的に劇の練習に取り組むようになった。仕掛けあそびをとおして、「誰かのために頑張ること」や「仲間をたいせつにすること」などを伝えることができ、クラスの中で思いやりの気持ちが増えたことが嬉しい。

分析：仕掛けあそびは、保育者側の思いで子どもをのせて行う危険性もある。保育者には11月のお泊り保育で発表会の劇の題材に子どもが入れるようにするという意図が最初にあったが、一連の仕掛け遊びのきっかけは、ツワの葉を「豆太のかさじゃない？」という子どもからの声である。その後の展開も子どもと相談したり子どもの声を拾い上げたりと、子どもが考えて行った活動となっている。豆太の手紙やカエルたち（職員）の合唱団など作画的なところは見られるが、子どもたちが豆太に会いたいという願いをもっていたことを考えると、この年齢の子どもへの仕掛けあそびとしては無理のない設定と言える。

#### (5) 自分の思いを友達に表現する

##### J「気持ちを受け止め支える保育をめざして」(福岡県 M保育園 横井まゆみ)

対象児の年齢：3歳

取り入れた絵本：無記名

実践レポートの概要：A君は、身体を動かして遊ぶことが大好きだけれども初めてのことには苦手で、言葉で自分の気持ちを伝えたり人前で話したりすることが苦手で黙り込む。絵本を読むとき、近くの友達を押ししてしまう。「なんで押したの?」「ここがよかった?」と聞いても首を縦にも横にもせず、うつむいてしまう。自分の言葉で伝えてくれるように、どんなふうにも声かけすべきか困ったできごとであった。

実践者の気づき：これまでの保育は悪いことも良いことも正面から子どもにぶつけていくことが多かった。しかしA君との関わりから、子どもに逃げ場をつくることや、別の働きかけをすることのたいせつさに気づけた。

分析：直接、絵本との関わる実践ではないが、絵本を読むとき、A君が友達を押ししたことにより、自分の言葉で思いを伝えるにはどのような言葉かけが必要かを困った出来事として挙げられている。しかし、そのことから、保育者は自身の保育の問い直しができている。

##### K「あい、ほいくえんいく～友だちとの距離が縮まる時～」(熊本県 H保育園 柳麻美)

対象児の年齢：4・5歳

取り入れた絵本：『じごくのそうべい』

実践レポートの概要：体調不良で欠席がちなあいちゃんが入院することになり、クラスの子どもたちがお手紙を渡すと、あいちゃんは入院前に園に顔をみせてくれた。入院2日目に「あいちゃんに絵本を持っていこうと思うけどなんの絵本が好きかな?」と保育者が尋ねると、れんくんが、「たしかこないだあいちゃんがこれ読んでって言ってたよね」と『じごくのそうべい』を持ってきた。保育者も思い浮かべていた絵本だった。あいちゃんがふと言った一言に気づいてくれたことを嬉しく思う。退院後、あいちゃんから面白かったと絵本を

嬉しそうに話していた。この後からあいちゃんのお遊びの姿が変わってくる。積極的に自分の思いを伝え、休んだ友達を気遣ったりするようになる。

実践者の気づき：れんくんが、あいちゃんの一言に気づいてくれていたことを嬉しいと感じる。

4月当初は自分の思いさえ表に出さなかったあいちゃんが、年下の友達の気持ちに寄り添い、代弁して伝えてくれる姿に大きな成長を感じた。

分析：あいちゃんが「よんで」と言って読んでもらうことができていなかった絵本を、友だちが気づいて入院のお見舞いに持って来てもらえたことは、あいちゃんにとっては、クラスの友だちから自分のことをきちんと認めてもらえたという実感につながったのではないだろうか。そのことによって、あいちゃんに、自信ができたと考えられる。『じごくのそうべい』はあいちゃんとクラスの友だちとの信頼関係づくりに重要な役割を果たしている。

## (6) ごっこあそびへの発展

### L「ごっこ遊びを楽しもう～言葉でのつながりを大切に～」(福岡県 A保育園 中村豪)

対象児の年齢：2歳

取り入れた絵本：『3匹のこぶた』

実践レポートの概要：2歳児21名のクラスを4名の保育士で担当する。トラブル続きの毎日であったことから、2グループに分けて活動することになり、少しずつ落ち着いて過ごせるようになる。ボール遊びやジュースやさんごっこなど楽しむ。毎日読んでいる絵本のなかで大好きなのは「3匹のこぶた」であるが、子どもたちはオオカミを恐がり保育者の後ろに隠れてみる。こぶたとオオカミのやりとりを覚えた子どもたちは「フーしたらダメ」、「お家壊したらダメ！」と自然に言葉が出てくるようになる。保育者はこれをきっかけに、友達にも言葉を伝えられるようになってほしいと、3匹のこぶたごっこを楽しむことにした。お家づくりでは大きな段ボールに画用紙や広告を藁に見立てて貼っていく。意欲的に参加する子どももいれば興味のない子もいる。しかし、完成すると、どの子どもも興味を示したので、木のお家やレンガのお家を子どもたちと一緒に作る。トラブルになりかけたときは、保育者が仲立ちにはいる。保育者がオオカミになり、ごっこあそびを楽しむ。近くの広場で小さな小屋を見かけると、ここにオオカミさんいるかな、呼んでみよう、子どもたち同士で顔を見合わせている姿にオオカミが子どもたちのなかでどんどん膨れているを感じる。いつものようにごっこをしていると、数人の子どもが「ガオー」と言う姿があり、こぶた役とオオカミ役に分かれて遊ぶことになる。「レンガの家も吹き飛ばしてやる!」「壁をガジガジする!」「食べられないよーって言うてみる」など絵本にはない言葉も出てくるほどごっこを楽しむ。

実践者の気づき：初めは言葉で伝えられずにトラブルになることが多かったが、イメージしやすいごっこ遊びを通して、友達と遊ぶ姿や簡単な言葉のやり取りができるようになり、かみつきやひっかきなどのトラブルが減ってきた。個々の遊びからお家づくりという共通の経験によって、一人ひとりのイメージがつながり友達との関りが増え、言葉で思いを伝える楽しさにつながったのではないか。

分析：保育者は一方的に子どもたちを「ごっこあそび」に引き込むのではなく、子どもの様子を見ながら、ていねいに「3匹のこぶたごっこ」を行っている。『3匹のこぶた』の絵本を子どもたちが見る様子から、保育者は言葉でのやりとりを友達同士でできたらと、ごっこを思い立つが、まず家づくりから入っている。興味をもって手伝う子どもばかりではないことを前提にして作るが、家ができる(形になる)とどの子どもにも遊びが見えてきて興味を示し、一緒に作るようになる。「お家」が形として表れることで2歳児たちが

イメージを共通にすることができたようである。お家づくりのトラブルも保育者が仲立ちをして、「～だったね」とお互いの思いを代弁して伝え合う。最初はオオカミ役が保育者であったが、子どもの様子からオオカミとこぶた役に分かれてのあそびにするなど、子どもたちが十分イメージを膨らませて遊ぶことができるように配慮している。こぶたとオオカミのハラハラするようなやりとりのあるこの絵本のごっこや劇あそびはよくあるが、「ごっこをする」ことだけに眼を向けず、子どもたちが今何をどう感じて遊ぼうとしているかを子どもの姿からよく読み取った取り組みとなっている。

## (7) 保育環境

M「家庭的保育事業の立ち上げ～1年目を振り返って～」(鹿児島県 S 保育所 川崎秀弥)

対象児の年齢：0～2歳

取り入れた絵本：無記名

実践レポートの概要：家庭的保育事業での保育内容と環境づくりとして、絵本や玩具が示されている。絵本と和久童具を取り入れた保育をしており、絵本は年齢(1・2歳)に応じた質の高い物が選定され、すぐ手にとれるように環境が整えられている。本棚も同様で、子どもたちが絵本を目で見て読んでみたいと思えるようにこだわって配置をしている。和久童具も子どもたちが楽しい、嬉しいと思えるような童具である。遊び=生活の子どもたちがすぐに外に行けるように園庭整備も行われている。実践レポートでは、その他家庭的保育事業の良さやとともに葛藤や、課題についても書かれている。

実践者の気づき：子どもが自分で目で見たいと思う絵本や遊びたいと思う童具の選定と配慮など環境整備の重要性をこだわっている。

分析：0歳児1名、1歳児3名、2歳児1名、計5名の家庭的保育事業であるが、少人数でしかも年齢、月例の異なる子どもたちの保育であるため、子どもたちに提供する絵本や玩具には特別にこだわった選定が行われていることが感じられる。特に、読みたい(読んでほしい)と思うような絵本をすぐに手にとることができる環境づくりは非常に重要な保育の視点である。ただ、実践レポートには環境設定についての記載が中心であったので、子どもたちがどのように絵本や和久童具を楽しんでいるのかが示されていないのは残念である。

## 4 考察

以上、実践レポート13本を分析をすることによって、集団保育の場における絵本の役割として以下のようにまとめることができる。なお、実践には多くの図鑑も使われていたため、図鑑も含めてまとめる。

### ① 具体的体験をさらに深め、広げる

乳幼児期には、まずは日常の具体的なモノとの十分なふれあいが重要である。なかでも虫やカニ、ザリガニなど子どもが直接手で触れることができ、動く生き物は魅力である。その具体的体験をもとに関心や疑問を広げ、イメージを広げて楽しいあそびに展開していくときに絵本や図鑑が非常に有効な力を発揮すると考えられる。実践レポートは、2歳児の絵本や図鑑に関わる取り組みが多かったが、子どもの発達的な特徴を押さえていない実践が行われていた。保育者たちは、子どもの興味や関心がどこにあるのかを子どもの姿をよく受け止め理解している。Eの実践では、朝の集まりに参加しない二人の思いと行為を認め、さらに二人が見つけた虫をクラスの友達の中に入れていねいに紹介している。次第に二人から友達に虫の魅力が伝わり、みんなの関心が虫にむかうようになって絵本や図鑑が生きてくる。Aの場合も子どもたちが存分に虫たちと遊んで、絵本や図鑑で確かめ、あそびを広げて

いる。2歳児といえども、子どもたちの観察力の鋭さや、思考の深さを感じられる実践事例である。あそびだけでなく、Eでは2歳児たちがカブトムシやダンゴムシの飼育と絵本や図鑑をとおして、生き物の「食」と生態の理解を深めている。Fでは、小さなカニ「ハッチ」とのふれあいが保育者のねらいである平和や命、友達について理解していく手助けとなっている。そのなかで、絵本がペーパーサートやパネルシアターなどに加工されて紹介されている。子どもたちにとって「絵本」の世界とは異なった経験であるが、登場人物が動くことは2歳児には魅力であり、抽象的で2歳児には難しいことも理解しやすくなるといえる。また、Eのあつくとひーくんたちにみられるように3歳の子どもたちにも、具体的な体験を絵本や図鑑が広げ深めていく役割をもっている。

## ②子どもたちのイメージを育て、友達とイメージをともにし力を合わせることを後押しする

実践レポートから、絵本や図鑑が子どもたちのイメージを育て、友達とイメージをともにし、協力してあそびや劇ごっこ、制作などの活動に取り組む力となり、自信のない子どもにも自信をつけていることが読み取れる。Hでは、3歳児たちはオオカミが怖いけれども、保育者が毎日読み聞かせをすることで、子どもにとってオオカミは怖いけれど『おおかみと七ひきのこやぎ』は大好きな絵本となり、オオカミと子やぎごっこあそびを楽しむ。その土台があって、友達とともに劇ごっこを楽しむことができている。毎日の繰り返しの読み聞かせの重要性が出されているといえる。

Kの休みがちで友達とのあそびでも自分を出せなかったあいちゃんの入院では、友達からの手紙はもちろんあいちゃんへの励ましになったであろう。しかしそれ以上にあいちゃんへの励ましと自信になったのは、あいちゃんが読んでほしいと言っていた『じごくのそうべい』の絵本をれんくんが憶えていてくれ、お見舞いに持ってきてもらえたことである。そのことがあいちゃんの自分を変えるきっかけになっている。つまり、自分の存在を友達が認めてくれているという手ごたえが得られ、自信につながったといえる。Dの障がいをもっているりおなちゃんが、『クムガンサンのトラ』の劇に出て演じたことや、「がんばった」と自分でも言えたことも、それまでの友達との関係で自信をつけていくことができたからである。

絵本が子どもに影響を与えるのには、その内容もちろん重要であるが、これらの実践例にみられるようにどのような絵本であっても友達との関係でその子どもにとってかけがえのないものとなりうるのである。したがって、絵本の内容や読み聞かせだけが重要ではなく、クラスの子どもたちの関係性が問われている。図鑑も含めて絵本は子どもたちの関係性を育み、その関係性が子どもたちにとっての絵本の世界をより豊かにし、それが子どもたちの関係性をさらに深めていくといえる。

## ③子どもの興味やあそびを踏まえた仕掛けあそびの手がかりとなる

生活発表会やお泊り保育などに向けて、伝統的に仕掛けあそびが行われている園も多くある、その手掛かり、つまりきっかけづくりとして絵本が使われることが多い。今回の分析でも、保育者からのねらいをもってあそびが仕掛けられ、運動会や劇ごっこにつながられている実践レポートがある。2歳児や3歳児など幼い子どもの場合、劇の題材を自分たちから出していくことは難しく、どうしても保育者から設定する必要がある。しかしながら、たとえ保育者が設定するとしても、保育者の思い込みやねらいだけを優先するのではなく子どもの興味やあそび、つぶやきなどをもとに、子どもとの対話で創り上げていくべきである。今回分析した実践レポートにおいては、Hの『おおかみと七ひきのこやぎ』も、怖いという子どもたちに対して、かなり強引に毎日読み聞かせをしている。それによって子どもたちの関心を次第に集め、イメージを膨らませ、結果的に子どもたちが自由に遊べるようになっていく。そのうえでの「劇ごっこ」である。子どもの「怖い」も子どもたちが絵本をまったく拒否しているわけではない。保育者の後ろに隠れながら読み聞かせに参加している子どもの姿に、「絵本を見たい（読みたい）」要求があることを保育者が見出していたから読み続けたのであろう。また、Iの『カエルの豆太』のように子どもからの「これ豆太のかさじゃない？」を拾い上げ、子どもたちのイメージを保育者が子どもたちとともに育てていって劇ごっこにつないでいる。

仕掛けあそびの場合は、子どもが喜ぶ絵本を読んですぐできるというのではなく、子どもの様子やつぶやきなどを汲みとり、子どもとの対話をたいせつにして時間をかけたていねいな取り組みが必要といえる。

#### ④日常の保育の隙間を埋め保育を豊かに楽しくする

前述のように、絵本は活動と活動の合間に読まれていることが多い。まさに子どもたちの日常生活の一部となっている。絵本の読み聞かせによって子どもたちは絵本の世界を共有することができる。また、子どもたちは、自由な時間に関心のあるモノについて絵本や図鑑から理解を深め、イメージを広げて、活動を豊かに展開していている。AとE（2歳児）や、G（4・5歳児）の実践では、子どもたちが友達と一緒に生き物と図鑑の時間を実に生き生きと過ごしている。いわゆる保育の主活動の時間ではないかもしれないが、子どもにとってはまさに自分たちのための主活動の時間となっている。

そうであるからこそ、子どもたちに何の絵本を、どのように紹介するかが問われる。Mの実践レポートのように3歳未満児であっても子どもたちがいつも手にすることができる優れた絵本や図鑑を準備しておくことは重要である。また、日々の保育には、読み聞かせの時間でのトラブルもつきものである。Iの実践レポートのようにそのトラブルから保育の課題を見出すこともある。絵本の読み聞かせや、子どもたちが絵本や図鑑を楽しむことが日々の保育の隙間を魅力的に埋める活動となっており、保育を豊かに楽しくしているのである。だからこそ、意識的に絵本を子どもたちに提供することが求められる。

(注)

- 1) 第49回九州保育団体合同研究集会宮崎集会の『提案集』（2019年9月7日～8日）に掲載された。
- 2) 実践レポートの中には、作者および出版社が特定できないものもあったため、すべて絵本のタイトルだけを記載する。またタイトルが記名されていない場合は、〇〇の絵本などとする。

#### 【参考文献】

- 曾澤のはら・片山美香・高橋敏之（2019）幼児を対象とした集団における絵本の読み聞かせに関する研究動向，岡山大学教師教育開発センター紀要，9，215-228.
- 青戸泰子・田邊資章・原田夏帆（2018）保育・幼児教育現場における絵本の読み聞かせの意義 関東学院大学人間環境学会紀要，30，39-46.
- 中澤潤・杉本直子・衣笠恵子・入江綾子（2005）絵本の読み聞かせのグループサイズが幼児の物語理解・イメージ形成に及ぼす影響，千葉大学教育学部研究紀要，53，203-210.
- 奥山優佳・香曾我部琢（2008）想像世界の共有化を修辞する保育者の身体技法—クラス活動における絵本の読み聞かせの相互行為分析より—，東北生活文化大学東北生活文化大学短期大学部紀要，39，41-47.
- 大元千種・青柳恵里香（2012）絵本に対する幼児の関心に及ぼす読み聞かせのグループサイズの影響，筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要，7，167-178.
- 齋藤善郎（2017）保育を広げる—絵本の読み聞かせ実践を通して—，相山女学園大学教育学部紀要，10，313-321.
- 田代康子（2001）もっかい読んで 絵本をおもしろがる子どもの心理 ひとなる書房
- 横山真貴子・水野千具沙（2008）保育における集団に対する絵本の読み聞かせの意義—5歳児クラスの読み聞かせ場面の観察から—，教育実践総合センター研究紀要，17，41-51.